

氏名：小布施 未桂
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲第 257 号
学位授与年月日：2024 年 9 月 17 日
学位授与の要件：学位規則第 5 条第 1 項該当
論文審査委員：主査 奥 裕美（聖路加国際大学教授）
副査 吉田 俊子（聖路加国際大学教授）
副査 三浦 友理子（聖路加国際大学准教授）
副査 池亀 俊美（榊原記念病院・副院長兼主任看護部長）

論文題目：高齢心不全患者の「口から食べる」を支援する看護師教育：実行可能性研究

博士論文審査結果

審査における主な指摘は以下であった。

本研究は、高齢心不全患者が「口から食べる」ことを支援する看護師教育の実行可能性を評価し、高齢心不全患者の「口から食べる」の支援の臨床適応に向けた示唆を得ることを目的に実施した。

病院に入院する高齢心不全患者の口腔の状態、食事とその支援に関する 3 つの予備研究に基づいて開発した教育ツールを用いた自己学習型教育介入を一群事前事後比較の準実験的研究デザインにて実施し、高齢心不全患者への「口から食べる」支援の実行可能性を評価した。

7 施設 111 名の看護師より研究協力同意を取得し、教材視聴後・1 か月後の調査票にそれぞれ 73 名・62 名から回答を得た結果、自己学習型の教育介入によって知識と看護師の行動の一部が向上し、統計学的にも有意な差があった。経験的な需要性としても食べる支援の導入は概ね受け入れられ、さらに「（患者の）口腔を意識するようになった」「口腔観察が増えた」といった看護実践の変化も確認された。一方「忙しさ」や「患者の協力が得られない」など、患者の「口から食べる」の支援を困難とする障壁も明らかになった。

審査では、主に以下の点について指摘があった。

- ・ 心不全患者の特徴を踏まえた「口から食べる」こと、QOL との関係について追記すること。
- ・ 看護師教育から患者のセルフケア支援につながった例について追記すること。
- ・ 患者の病態等の違いによる「口から食べる」支援の開始時期や、目標設定について考察し記載すること。
- ・ 今後の教育方法の可能性として、看護師の情意領域にもアプローチするなど効果的に学ぶことができる方法や、教育者の育成などについて検討すること。

修正後の論文では、上記について適切に修正されていることを審査員で確認した。

「口から食べることは生きること」として、研究者は一貫して「食べる」こと、およびその支援方法に関心を持ち、口腔ケアや栄養摂取に関する綿密な研究を積み重ねてきた。近年高齢者が可能な限り自分の口から食べること、その機能を維持するケアの重要性が認識されており、特に心不全患者においては、フレイルサイクルを引き起こす栄養障害防止の側面からも適切な口腔内のケアの実施が求められている。このような背景のなか、研究者はベッドサイドでの実装を強く意識し、実用性のあるわかりやすい教材を作成した。教材は、今後の普及が強く期待されるものであり、研究者の実直で丁寧な取り組み姿勢とともに高く評価された。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。

